

葬送儀礼に携わる人々の職業観
－式担当者と納棺師の主観的語りから－

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
上村 愛香

これまで葬送儀礼に従事する者たちを対象とした研究はなされてはいない。しかし現在は、葬儀は葬儀運営を業務とする専門業者によって執り行われている。通産省（現・経済産業省）より認可を受け、葬祭業はサービス業として認められることになった。中でも式を担当する式担当者と湯灌・納棺を担当する納棺師の存在は欠かせない。そこでアメリカの社会学者 Hochschild が定義した感情労働の概念を用いた。健康問題についても、様々な状態の遺体と直面すること、様々な精神状態にある遺族と接するという業務特有の点からみても、精神的疲労を伴うと考えられた。本研究を通し、葬儀業界への新たな知見、よりよいサービスの提供に繋がるのではないかと考えた。そこで本研究は、葬送儀礼に従事する、特に遺族や故人と接触する式担当者と納棺師たちの職業観を明らかにしていくことを目的とした。職業観や感情労働の面、それに加えメンタルヘルスについてリサーチクエスチョンを立て明らかにした。対象は式担当者 3 名と納棺師 3 名の計 6 名であり、インタビュー調査を実施した。分析方法は M-GTA による分析を行った。

その結果、葬送儀礼従事者の成長や職業観に繋がる、主観的体験の重要な点が 7 つ明らかとなった。第 1 に、調査協力者全員が自分の意思でこの仕事に就職していたが本人の意思とは裏腹に周囲の反応には職業への偏見があったことである。第 2 に、業務への心がけと遺族への心がけ、故人への心がけを持って従事していたことである。この 3 つの心がけは独立したものではなく、互いに影響しあい循環が生じていた。第 3 に、仕事をするにつれ、職業への偏見を持っていた周囲が仕事を認めてくれた変化があったことである。第 4 に、3 つの心がけや仕事の経験を通して職業観を形成していったことである。そして第 5 に、職業観を形成するためには 3 つの心がけだけではなく、職業観を支える要素も関連していたことである。しかし、第 6 としてストレスな部分があることが明らかとなった。第 7 にはストレスへの対処を行っていたことが明らかとなった。自身の感情のコントロールを求められることから感情労働の概念が葬送儀礼従事者にも当てはまることが示唆された。

今後の課題としては、葬送儀礼従事者にも感情労働の面があることが明らかになったことでバーンアウトがある可能性も考慮し、サポート体制を整えることである。また、本研究の式担当者と納棺師以外の葬送儀礼従事者に着目した研究もなされるべきである。その点も考慮した今後の更なる研究発展が望まれるといえる。